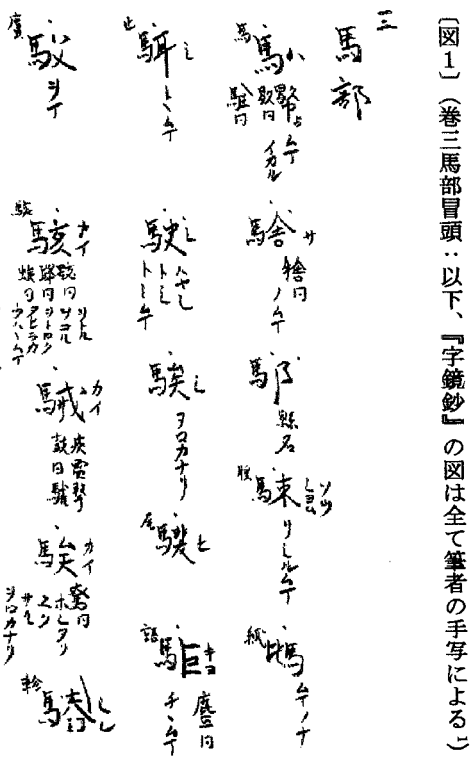
（『訓点語と訓点資料』 第140輯　平成30年3月　2018.3.31）

天文本『字鏡鈔』乙部の本文について―合点が付された本文をめぐって―

中野　直樹

〔図1〕（巻三馬部冒頭：以下、『字鏡鈔』の図は全て筆者の手写による）



1：はじめに

前田育徳会尊経閣文庫に、天文本『字鏡鈔』六巻六冊（以下、『字鏡鈔』）が存する。本字書は、「字鏡鈔」諸本の一つで、本文の体裁及び注文に原初形態を残している点で最重要の本である。

本字書については、貞苅（1967）・山田（1967）に考察があり、両氏によって本書の典拠及び、本文の構造の大部分が明らかにされた。しかしながら、「字鏡鈔」諸本間での先後関係、先行書に見えない和訓の典拠、合点が付された本文の典拠などいくつかの問題は残された。

本稿は右の諸問題のうち、原初形態を残す所謂乙部の本文を用い、合点が付された本文（以下、合点付本文）の典拠を明らかにすることを通じて、その典拠となった書の用いられ方と本書の本文の特徴について考察するものである。

2：天文本『字鏡鈔』について

2－1：天文本『字鏡鈔』の本文

『字鏡鈔』は、部首立て韻配列の字書であり、本文を単字で掲出し、それに注を付すという形式を持つ（〔図1〕）。六冊全体の掲出字数は31,115字と大部である。本文の書写態度は巻によってまちまちだが、毎半葉で縦五～七行、横三～五段で比較的おおらかに書写されており、無辺無界となっている。本文の注文には、声点・反切・仮名音注・直音注・韻目注・異体字注・和訓・漢文注がある。

本書の書写年代は巻一、二、三、六巻末の奥書によって、天文十六年（1547）頃と考えられている（中田・林（1982））。しかし、祖本の成立は、諸本中寛元年間（1243-1246）の識語を有するものがあ

り[27]、鎌倉初期頃とみられる（貞苅（1967）・山田（1967））。

2-2：先行研究

山田（1967）は、『字鏡鈔』の本文は字形により配列される甲部（巻一・二・六）と、韻順により配列される乙部（巻三・四・五）に分けられるとし、乙部の本文が切韻系韻書の韻順に倣って配列される一方、甲部はそれが解体されて字形配列になっており、韻目注も十分に付されておらず用をなしていないことから、乙部（巻三・四・五）に改編前の原初形態が残っていることを指摘した。

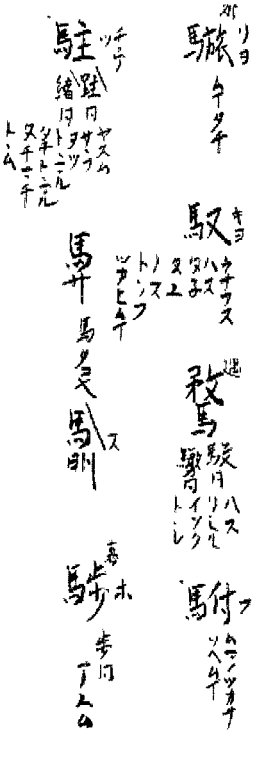
貞苅（1967）は乙部の各部首内の本文の典拠と注文の特徴から本文が三つに分けられ、それぞれ切韻系韻書（第一群）・改編本系『類聚名義抄』・改編本系『玉篇』・典拠不明の書（第二・三群）をもとにして作成されていることを明らかにした（注文の特徴については後述）。

先行研究で指摘されたように、本書の原初形態は乙部の本文に残っているので、本稿では乙部の巻三・四・五を用いて考察を進める（以下、本稿で本文というのは乙部の本文を指す）。

本稿で取り上げる合点付本文は、乙部本文に見られる三つの群のうち第一群に見られ[28]、部首によっては本文の半数以上を占める場合もあり、無視できない量を持つ。

以下、『字鏡鈔』本文の各群の体裁について貞苅（1967）・山田（1967）によりつつ確認する。なお、各群の本文字数は重複字やミセケチを除いて筆者が計算した数値である。

〔図2〕（第一群：乙部合計12,796字（巻三3,743字、巻四5,014字、巻五4,039字））



第一群には、声点・仮名音注・韻目注・異体字注・和訓・漢文注（少量）が付されており[29]、本文数と注文が最も充実した群となっている。また、第一群の異体字注・和訓は大部分が改編本系『類聚名義抄』にみえる[30]。漢文注は典拠不明である。

貞苅（1967）は、第一群本文は奇字が少なく、普通使用される字が多いとしたが、一部『広韻』にない字も見られ、それには合点が付されていることを指摘した（後述）。第一群の典拠は先行研究では明示されなかったが、筆者の調査によれば、合点が付されていない本文の殆どが『広韻』に見られるので（約98％）、典拠は『広韻』に近い切韻系韻書と見られる。

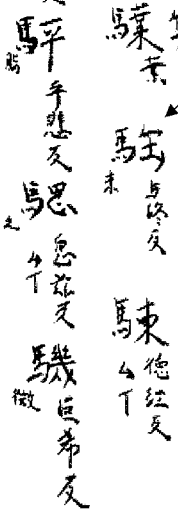
本文は部首の字を先頭にして切韻系韻書の韻順に配列される。例えば、馬部を例にとれば「馬」字（上声馬韻）から本文が始まり、馬韻の馬偏を持つ字がなくなると、同じ上声の先頭に戻って董韻から馬偏の字が並べられ、次いで平声に移り、平声の馬偏の字がなくなると、順に去声、入声の馬偏の字が配列される。部首が韻目と共通しない場合も部首と同じ字が先頭に来て、当該字の所属韻から同

声調の同部首の字が配列され、次いで他の声調の同部首の字が続く。

また、本文の右肩に合点が付されることがあるが、これは基本的に第一群にのみ見られる（〔図3〕）。「字鏡鈔」諸本に見られる合点については、岡田（1942）が、寛元本『字鏡集』の識語に見られる朱点と墨点に関する記述との関連を指摘しているが、合点の意味は分からないとした。貞苅（1967）は、天文本『字鏡鈔』の合点が付された本文について、「廣韻などとくらべてみると、それに出てこない文字、あるいは偏旁冠脚を誤って編入したと見られる文字もままみることができる。そしてこれらには墨で合点を付したものが多い。いつ、だれが、何のため付したものかわからない」として典拠は不明としている。

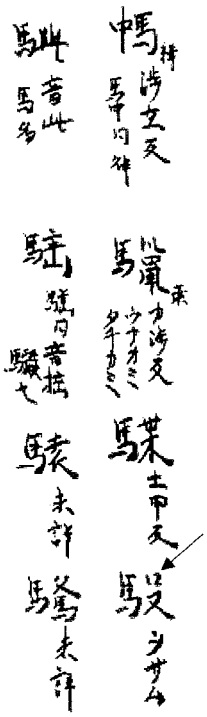
〔図3〕（第一群合点付本文例）

〔図4〕（第二群：乙部合計1,894字（巻三525字、巻四736字、巻五633字）矢印指示字以下）



第二群は第一群の直後に続く。注文として、反切・仮名音注（少量）・韻目注・異体字注（少量）・和訓・漢文注（少量）が付され、反切によって音を示すのが通例である。第一群と異なり、注文の数は少ない。本文配列は切韻系韻書の韻順に配列されており、必ず平声先頭の東韻から始まる。本文および注文は、改編本系『類聚名義抄』と改編本系『玉篇』による。[8]

〔図5〕（第三群：乙部合計2,058字（巻三668字、巻四817字、巻五573字）矢印指示字以下）



第二群の直後に続く第三群には、直音注・反切（少量）・仮名音注（少量）・異体字注・和訓（少量）・漢文注が見られる。本文に韻目注はなく、第一・二群のような配列規則も見出せない。無注の字も多く雑多な群である。本文および注文は、改編本系『類聚名義抄』と改編本系『玉篇』による。但し、これらに見られない本文・注文も存する。注文の数は第二群と同じく少ない。

以上、各群について確認した。三つの群は同部首内で連続しているが、それぞれに付される注文が異なっており、一見して各群を見分けることができる。また、各群が混交することも原則ない。

3：合点付本文について

本章では、第一群の本文に見られる合点がどの程度見られるのか、また、本文中においてどのような分布になっているのかを確認する。

3‐1：合点付本文の総数

まず、第一群の本文数と、その中での合点付本文の数を見ておく（〔表1〕）。

〔表1〕：乙部本文における第一群の字数とその内の合点付本文の字数（割合はおおよその数値。以下同じ）

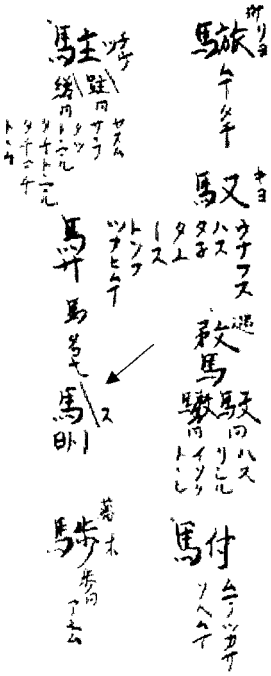
	第一群本文	内合点付本文。
巻三	3,743	521 14%
巻四	5,014	1,133 22.6%
巻五	4,039	795 19.7%
合計	12,796	2,449 19.1%

〔表1〕から第一群本文全体の約二割もの掲出字に合点が付されており、合点付本文は第一群本文に対する数字程度の補入といったものではなく、増補された可能性がある字群であることが分かる。

3‐2：合点付本文の位置

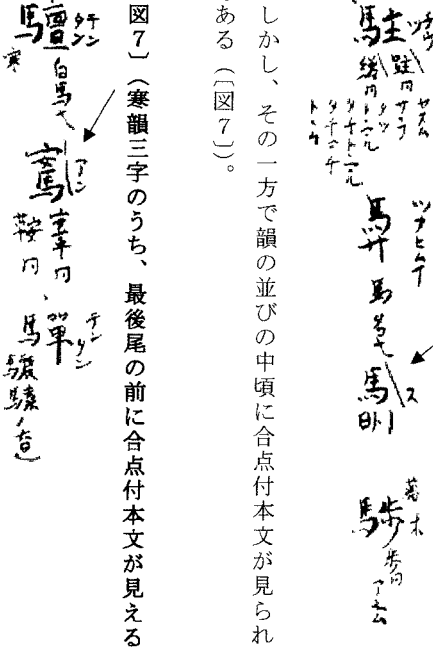
次に、第一群の本文の並びにおいて合点付本文が出現する位置について確認する。第一群は本文が切韻系韻書における韻順によって配列されているが、合点付本文は各韻の並びの最後尾に位置することが多い（〔図6〕）。

〔図6〕（遇韻五字のうち、最後尾に合点付本文が見える）



しかし、その一方で韻の並びの中頃に合点付本文が見られることもある（〔図7〕）。

〔図7〕（寒韻三字のうち、最後尾の前に合点付本文が見える）



本文の韻順の中頃に合点付本文が出てくるということが何を意味しているのかについては後述する。因みに、合点付本文は乙部に2,449字存するが、このうち、韻順の中頃に見える合点付本文は、600字であり、数は少なくない。

4：合点付本文と先行字書との関係

ここでは、合点付本文の典拠について考察する。第二・三群の本文および、第一～三群の注文には、改編本系『類聚名義抄』、改編本系『玉篇』、典拠不明の書が引用されていることが明らかにされており、これら先行字書と『字鏡鈔』の関係は深い。そこで、合点付本文も上記三つを典拠としている可能性が考えられる為、比較を行う。

〔表2〕は、合点付本文が各書の本文とどれほどの割合で一致するのかを示している。なお、改編本系『類聚名義抄』には、先行研究と同じく観智院本を用い（以下、「名義抄」）、改編本系『玉篇』には宋本『玉篇』（以下、「宋本」）を用いた。

〔表2〕：合点付本文と先行字書との本文比較結果

	巻三	巻四	巻五	合計
合点付本文	521	1,133	795	2,449
「名義抄」にのみ存する字	189	623	343	1,155 47.2%
「宋本」にのみ存する字	44	35	52	131 5.3%
「名義抄」「宋本」双方に存する字	102	72	101	275 11.2%
典拠不明字	186	403	299	888 36.3%

〔表2〕より、合点付本文は六割弱が「名義抄」に見えることが知られる。また、少数ながら「宋本」にも同じ字が見える他、典拠不明の字は四割に満たないものの、数は少なくないことが分かる。

4-1：「名義抄」の注文との比較

続いて本項では、合点付本文に付された注文と「名義抄」の注文の関係について見ておく（〔表3〕）。

〔表3〕：合点付本文と「名義抄」との注文比較結果

	巻三	巻四	巻五	合計
合点付本文のうち「名義抄」のみに存する字	189	623	343	1,155
合点付本文に「名義抄」の注が存する字 [10]	152	558	281	991 85.8%
互いに無注 [11]	7	28	29	64 5.5%
注が互いに合わない字	30	37	33	100 8.7%

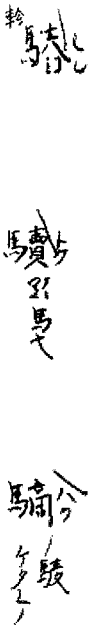
〔表3〕から、合点付本文には「名義抄」と同じ注文がかなり多く見え、それは巻によって変わらないことが確認できる。合点が付

されていない本文の注文にも「名義抄」が引用されていることから、第一群における「名義抄」の注文の引用方針は、合点の有無に関わらず同じであったことが分かる。

4-2：「宋本」の注文との比較

続いて、合点付本文のうち、「宋本」にのみ存する字の注文と、「宋本」の注文との比較を行った。その結果、合点付本文には「宋本」の注文が引かれていないことが明らかとなった[12]。次に馬部からいくつか例を示す（〔図8〕）。

〔図8〕（『字鏡鈔』（馬部合点付本文））



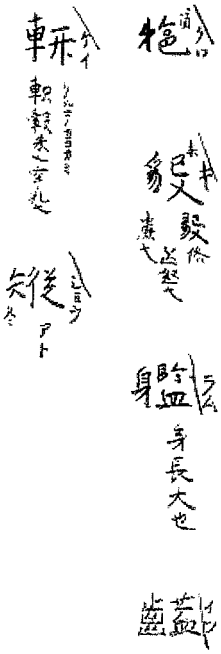
（「宋本」（馬部））

これらの字は少量とはいえ、『広韻』には見えず、「宋本」に存する字であることは注目すべきである。また、「名義抄」と「宋本」双方に見られる字については、「名義抄」に注文があればそれを引き、「宋本」からは注文を引かない引用態度となっている。

4-3：典拠不明の合点付本文について

これまで、「名義抄」・「宋本」と合点付本文とを注文を含めて比較し、両者の関係を見てきた。しかしながら、合点付本文にはこれら二書には見られない典拠不明の字が、計888字存する。これらの字の注文は無注であるか、異体字注・和訓・漢文注が一、二個付されるという体裁となっている（〔図9〕）。

〔図9〕（『字鏡鈔』（合点付本文のうち典拠不明字））



筆者もまた出所不明とされた諸字の典拠を求めたが、見出せなかった。ここでは、これら字群の注の特徴を挙げるに留める。

4-4：合点付本文と第二・三群の典拠は同じか

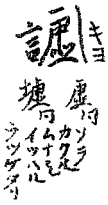
貞苅（1967）は、第二・三群に引用された『類聚名義抄』・『玉篇』は改編本系統であるとする。それは、改編本に見られる本文及び注文が第二・三群にも見られるということが根拠となっている。

合点付本文にも改編本系『類聚名義抄』・『玉篇』にのみ見られる

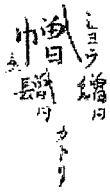
本文と注文が見られる。次に例を示す（〔図10〕）。

〔図10〕（合点付本文における改編本にのみ存する本文と注文）

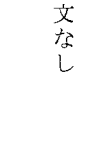
『字鏡鈔』　図書寮『類聚名義抄』　観智院本『類聚名義抄』



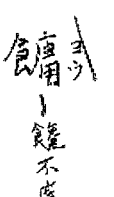
本文なし



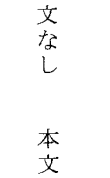
本文なし

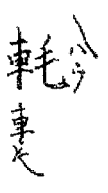


『字鏡鈔』　原本系『玉篇』　『篆隷万象名義』　宋本『玉篇』

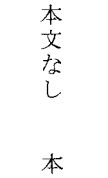


本文なし





本文なし



本文なし

右から、第二・三群および合点付本文の典拠となった『類聚名義抄』・『玉篇』は共に改編本系統の本ということになり、合点付本文と第二・三群の典拠は同じである可能性があると考えられるのである。

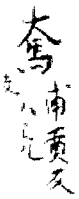
また、第三群の典拠不明字の注文を見ると、合点付本文の典拠不明字と同じような体裁になっていることが多い（〔図11〕）。

〔図11〕（『字鏡鈔』（第三群のうち典拠不明字））

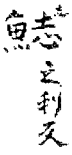
〔図9〕に示した典拠不明の合点付本文の注文と比較すると、同じような体裁となっていることが分かる。注文の体裁の類似が典拠を同じくする直接的な証拠にはならないが、合点付本文と第二・三群の典拠において、そのうちの二つ（「名義抄」・「宋本」）が共に改編本系統の本となっており、残りの典拠不明字も具体的な書名は分からないものの、注文の体裁が殆ど同じことを併せ見て、典拠は同じと見るのが良いのではないであろうか。

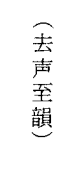
また、第二群の本文は韻順配列であるが、まれに帰韻を誤る例が存する（貞苅（1967））。これは反切を正しく読めなかったり、誤った反切が付され、そこから韻目注を付してしまったりしたことによって起こったミスと考えられるが、このような帰韻ミスは合点付本文にも確認され、これも典拠を同じくすることの傍証となりうる（〔図12〕・〔図13〕）。

〔図12〕（第二群帰韻ミス（貞苅（1967）より引用））


（去声寘韻）

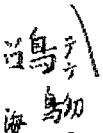
（去声線韻）

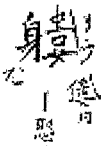

（去声至韻）

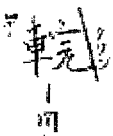

（上声哿韻）

（図13）（合点付本文帰韻ミス）

（上声準韻「宋本」尺尹切）


（平声蕭韻「宋本」呼幺切、『字鏡鈔』篠韻）


（去声遇韻「宋本」力句切）


（上声阮韻「宋本」虞遠切）

つまり、合点付本文の典拠となった書にも第二群と同じように反切が付されており、それを編者が読み誤ったか、そもそも誤った反切が本文に付されていた結果と考えられるのである。

4-5：合点の有無について

これまでに、合点が付された本文について見てきたが、本項ではこの合点が何を表示しているのかについて考察する。先に、第一群の本文は切韻系韻書を基にして作成されていることを確認しておいた。第一群（12,796字）において、合点が付されていない字は10,347字、付されている字は2449字である。合点が付されていない字のうち、『広韻』に見える字は9878字であり、さらに『広韻』と異体字関係になっている246字もひとまず含めれば、第一群本文と『広韻』は10,124字（約98％）が合うことになり、第一群本文は『広韻』に極めて近い本を基にしていることが分かる。一方の、合点が付されている字は、『広韻』に見える字が288字（約12％）であった。

合点を付す作業は、第一群の本文を韻書で対校することによって付すことができる。本文が一致すればその字に何も付さず、本文が対校用の韻書になければ、合点を付したのである（合点の無い字は殆ど『広韻』にあるので、対校に用いられた韻書は、『広韻』に近い韻書であったことが知られる）。つまり、合点は韻書には本来登録されていない「名義抄」「宋本」等による増補字であることを示しているのである。

このように考えたとき、合点が付されていないにも関わらず、『広韻』に無い字が問題となる。合点が付されていない字が10,347字で、このうち、『広韻』に見えるのは10,124字であった。残りの223字がどのような性格を持っているのかは明らかにされなければならない。この字の中には「名義抄」・「宋本」に同じ字を拾うことができる。

つまり、これらの字には本来であれば、合点が付されるべきであったが、それがなされなかったということになる。これはなぜであろうか。

これについては、第一群を対校した韻書は切韻系の韻書でありながらも「名義抄」や「宋本」等と一部掲出字が一致するような本文を持つ韻書であった可能性が考えられる。すなわち、このような韻書で対校を行ったため、「名義抄」や「宋本」等から引用したと思われる本文であっても、一部には合点が付され、一部には合点が付されなかったと考える。

また、これらの字の注文を見ると他の合点が付された本文のものと特に変わりはない。従って、本文が転写される際などに合点の脱落もあったのではないかと思われる。

因みに、この『広韻』に見えない223字の分布は本文中において、各韻順の最後尾に集中して見られるなどの偏りを見せることは無い。

次に、合点がいつ付されたのかについても若干考えてみたい。合点は、天文本だけに特有のものではなく、天文本とは別系統の永正本・龍大本にも見られる。従って、「字鏡鈔」には諸本が分岐する以前、祖本成立後早い段階で本文に合点が付されており、それが書写され流布していたと考えられる。

但し、現存する諸本中書写の古い応永本や寛元年間の識語を持つ寛元本には合点が見えない。とすると、「字鏡鈔」の成立後、すぐには合点が付されていなかったか、若しくは早い段階で合点は付されていたが、応永本や寛元本には合点が書写されなかったかのどちらかということになる。

筆者は、合点は「字鏡鈔」祖本成立後早い段階で付されており、応永本・寛元本では合点が書写されなかったと考える。なぜなら、応永本・寛元本と同じく、改編本である永正本・龍大本では合点は付されているからである。しかも、永正本については改編本の中でも古い本文を留めていることが指摘されている(貞苅(1967)参照)。

しかしながら、天文本・永正本・龍大本はいずれも書写が後代のものであり、他本からの移点が行われている可能性がある。そのため、合点がどの段階で付されたのか見極めることは難しい。今は、可能性について指摘しておくに留める。

5：合点付本文をめぐって

最後に、合点付本文がどの段階で増補されていたのか、また、合点付本文と典拠を同じくすると考えられる第二・三群の本文がどのような態度でもって増補されたのかについて考える。

3-2において、合点付本文は、韻順の並びの最後尾に位置することが多いが、韻の並びの中頃に出現する例も少なくないことを確認しておいた。それについて、〔表4〕に韻順の最後尾に出現する合点付本文とともに、字数を示す。〔表4〕を見ると中頃に出現する合点付本文が『広韻』に見える割合は最後尾に出現する合点付本文と同様に低くなっており、偏りはないことが分かる。

筆者は合点付本文の分布から、第一群の基になった韻書には、既にこれらの増補字が加えられており、合点は後に付されたと見る。『字鏡鈔』の第一群が成立した後に本文が他書から増補されたのであれば、それらの字が必ず韻順の並びの最後尾に現れるはずである。元々字が増補されていた韻書を下敷きにして第一群を作ったからこ

そ、これらの字が韻順の並びの中頃にも出現するのである。

〔表4〕：（合点付本文の数（出現位置別））

	巻三	巻四	巻五	合計
合点付本文	521	1,133	795	2,449
本文韻順の中頃に出現する合点付本文[13]	108	325	167	600
中頃出現字の内『広韻』に見える字	13	20	19	52 8.7%
本文韻順の最後尾に出現する合点付本文	413	808	628	1,849
最後尾出現字の内『広韻』に見える字	65	76	95	236 12.8%

さて、韻書が字書から本文を増補するという本文作成のあり方であるが、唐土にあっても、長孫訥言系の『切韻』が『説文解字』によって加字加訓を行い（上田（1973））、『刊謬補缺切韻』（王三）が『玉篇』を用いて増補するというような韻書と字書の関係が見られる（古屋（1984））。また、宋代に入ると、『集韻』が『大廣益會玉篇』を増補に用いている（水谷（2002））。

さらに後には、字書の『類篇』が『集韻』を部首立てにして成立しており、しかも、その本文配列は『集韻』の韻順を保持している（小川（1962））。『字鏡鈔』および、『字鏡鈔』第一群の典拠となった韻書にも、本文・注文の増補のあり方において、同じような過程が見られることをこれまで見てきた。このことは、本邦と唐土の字書編纂のありかたの関わりを見るうえで極めて注目すべきことである[14]。

次に、第二・三群についてである。この二つの群は第一群の後ろに付される形で増補されているが、なぜ第一群の本文に編入されなかったのかということが疑問となる。反切が付された本文を持っていたのならば、少なくとも第二群の本文は合点付本文と同じように韻配列の第一群に本文を加えることは可能であったはずである。当初は、第一群の後ろに付す形であっても、その後の改編課程において第一群の韻順の中に編入することもできたであろう。

これについては、注文を確認する必要があるので、第一群の注文の形式を見る（〔表5〕参照）。

〔表5〕を見ると、第一群本文の注文と合点付本文の注文は、異体字注と和訓が付されることが多く、その他の注文の体裁もほぼ同じ傾向にあることが分かる。

その一方で、第二・三群の注文はというと、第二群は反切・和訓・漢文注が、第三群も直音注・和訓・漢文注が一二付されるという状況であり（第二・三群は無注の字も多い）、注文の体裁が第一群・合点付本文と第二・三群とで大きく異なっているのである（〔図4〕・〔図5〕および、〔表6〕・〔表7〕参照）。単に本文を増補するだけであれば、注文の体裁に関わらず第一群に編入してしまえば良いはずである[15]。

しかし、そうはしなかったところをみると、編者は第一群を本字書の核として尊重し、第二・三群は掲出字をひとまず増やす目的を持って、作成されたものと考えられるのである。

〔表5〕：（第一群の本文および合点付本文に付された注の体裁[16]）

	異体字注	異体字注＋漢文注	異体字注＋和訓	異体字注＋和訓＋漢文注	無注（音注のみ含む）	漢文注	和訓	和訓＋漢文注
巻三	145 *26*	147 *44*	1,046 *175*	55 *14*	387 *32*	336 *156*	1,060 *60*	46 *14*
巻四	142 *29*	92 *60*	1,490 *594*	52 *36*	426 *53*	185 *259*	1,448 *82*	46 *20*
巻五	187 *18*	119 *69*	1,211 *297*	30 *25*	383 *37*	229 *251*	1,054 *73*	31 *25*
合計	474 4.6% *73* *3%*	358 3.5% *173* *7.1%*	3,747 36.2% *1,066* *43.5%*	137 1.3% *75* *3.1%*	1,196 11.6% *122* *5%*	750 7.2% *666* *27.2%*	3,562 34.4% *215* *8.8%*	123 1.2% *59* *2.4%*

〔表6〕：（第二群の注文の体裁[17]）

	異体字注	異体字注＋漢文注	異体字注＋和訓	異体字注＋和訓＋漢文注	無注（音注のみ含む）	漢文注	和訓	和訓＋漢文注	誤写等のため読解不能
巻三	23	7	9	3	258	82	136	7	0
巻四	26	8	21	2	298	91	278	7	5
巻五	25	10	8	1	296	64	224	4	1
合計	74 3.9%	25 1.3%	38 2%	6 0.3%	852 45%	237 12.5%	638 33.7%	18 1%	6 0.3%

〔表7〕：（第三群の注文の体裁[18]）

	巻三	巻四	巻五	合計
異体字注	20	38	20	78 3.8%
異体字注＋漢文注	5	3	5	13 0.6%
異体字注＋和訓	14	14	15	43 2.1%
異体字注＋和訓＋漢文注	0	1	0	1 0.05%
無注（音注のみ含む）	170	188	135	493 24%
漢文注	116	107	81	304 14.8%
和訓	332	452	303	1,087 52.8%
和訓＋漢文注	8	12	8	28 1.4%
誤写等のため読解不能	3	2	6	11 0.5%

右の表を見ると、第一群・合点付本文と第二・三群とは付される注文の体裁にかなり偏りがあることが分かる。第一群・合点付本文においては、異体字注と和訓が中心に付されているのに対し、第二・三群では、和訓のみの例が多くなっている。

また、三つの群において、一字に付される注文の総数はかなり異なっている。例えば、第一群の本文には三つ以上の異体字注・和訓が付されることは珍しくないが、第二・三群においては、異体字注が付されることはまれで、和訓も大半が一二個付されるにとどまる。

6：まとめ

以上、『字鏡鈔』乙部の合点付本文の典拠を中心に考察した。第一群に見られる合点付本文は第二・三群と典拠が同じと考えた。その典拠とは具体的に改編本系『類聚名義抄』・改編本系『玉篇』他である。第一群の本文は韻書を基礎としており、その韻書は右三書からの増補字をはじめから含んだ本であったと考えられる。

本字書の編者は第一群を主要箇所と考えていたと思われ、第一群（合点付本文含む）に無い字を改編本系『類聚名義抄』・改編本系『玉篇』等から増補したものの、第二・三群として別にするという方針を取った。このようにして、『字鏡鈔』乙部に見える本文の体裁となったと考えられる。

最後に、『字鏡鈔』乙部のような形態を持つ書が、何のための書だったのかということが疑問として残る。これについて、山田（1967）は本書が検韻の書ではなかったかと述べている。これは、『字鏡鈔』の原初形態を残す乙部の本文が韻順であり、かつ、部首配列が他の詩作用の書と同じく、意義分類になっていることや仮名音注が漢音で示されていることが根拠となっている。

氏の推定は、本文の分韻が『広韻』と同じであることや、『字鏡鈔』の後ろに付されている韻の一覧表である「四声綱目」が『広韻』の同用独用を踏まえて書写されていること、天文本と同系統の応永本・白河本では、韻目注が圏点に書き換えられて平他の形式となっていることからも首肯できる。

一方で、日本における韻書の利用は、詩作のためだけではなく経書・仏書に対する注釈のためなど、音訓を参照するために用いられていることも多い。本書は韻書の形態を残しつつも部首立てにされており、和訓の豊富な掲出字が多い（特に第一群）。本書が字書的な用途で用いられることがあるとすれば、韻順は字の検索の為に用いられたであろう。字音の知識（韻がどの順番で並ぶか、韻によってどのような音形になるか）があれば、部首立て韻順配列のシステムは探したい字の場所を特定するのに役立ったはずである[19]。

『字鏡鈔』本文の韻配列はその後の改編で解体され、全て字形によって配列されており、もはや韻の並びからは掲出字の検索は出来ないようになっている。「字鏡鈔」諸本の改編過程を見るに、本文はもともと乙部のような体裁であったと考えられる。当然そのような体裁の書は韻書として用いられたであろうが、字書としての機能も重視されたため、後に韻順よりも分かりやすい字形配列の本に変化したと考えられるのである。

今回は、『字鏡鈔』の本文の構成について合点付本文を足掛かりに考えてきた[20]。今後は、今回の結果を踏まえて、『字鏡鈔』の本文に付された注文の特徴や、各群の典拠となった『切韻』・『類聚名義抄』・『玉篇』が現存する諸本中どの本に近いのか等について考察していきたい。本稿は、それら諸問題を明らかにするための基礎研究である[21]。

［参考文献］

乾善彦（1995）「字鏡集（主要辞書各説）」西崎亨編『古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

上田正（1973）『切韻残巻諸本補正』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター

岡田希雄（1942）「寛元本字鏡集の識語」『歴史と國文学』（26-6）太洋社

小川環樹（1962）「宋・遼・金時代の字書」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東方学会（小川環樹『中国語学研究』（1977）創文社による）

貞苅伊徳（1967）「注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察」『本邦辞書史論叢』三省堂（貞苅伊徳（1998）『新撰字鏡の研究』汲古書院による）

古屋昭弘（1984）「王仁昫切韻と顧野王玉篇」『東洋学報』（65）東洋文庫

水谷誠（2002）「『大宋重修広韻』と『大広益会玉篇』」『創価大学人文論集』（14）創価大学（水谷誠（2004）『『集韻』系韻書の研究』白帝社による）

山田忠雄（1967）「字鏡鈔と字鏡抄」『本邦辞書史論叢』三省堂

【使用文献】
『原本玉篇殘巻』（1985）中華書局
『高山寺古辞書資料第一』（『篆隷万象名義』）高山寺典籍文書総合調査団編（1977）東京大学出版会
『字鏡鈔　天文本影印篇』中田祝夫・林義雄編（1982）勉誠社
『字鏡鈔』（天文年間書写前田育徳会尊経閣文庫蔵本）
『新校互註宋本廣韻定稿本』余廼永校注（2008）上海人民出版社
『宋本玉篇』（1983）北京市中国書店
『天理図書館善本叢書和書之部第三十二巻類聚名義抄観智院本佛』天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）八木書店
『天理図書館善本叢書和書之部第三十三巻類聚名義抄観智院本法』天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）八木書店
『天理図書館善本叢書和書之部第三十四巻類聚名義抄観智院本僧』天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）八木書店

【注】

1　影印本からの手写である。なお、手写に際して本文・注文の改編や省略は一切行わなかった。

2　但し、現存する寛元本『字鏡集』は寛元年間の写本ではないので注意が必要である。

3　ごくまれに、第二・三群にも合点が見られるが、今回は取り上げなかった。また、合点は天文本だけに見られるものではなく他の諸本（永正本・龍大本）にも見られる。

4　声点と韻目注は朱点。和訓にも朱声点が加点されることがある。また、本文の真上に朱点が打たれることがあるが、これが何を示すものか今のところ分からない。

5　貞苅（1967）は、観智院本を用いて比較している。

6　原本を見ると、合点には朱墨の両様がある。合点の色の違いについては改めて考察したい。

7　韻目注は第一群と同じく朱点である。

8　貞苅（1967）は、『類聚名義抄』は観智院本を用いて調査しているが、『玉篇』の所拠本は明らかでない。

9　合点がミセケチや庵点とともに付されている例は除いた。庵点は同部首もしくは他部首に本文が重複している場合に付されたものであると思われるが、重複していなくても庵点が付される場合もありその役割ははっきりしない。

10　「名義抄」の注文が一つでも『字鏡鈔』に見られればこの欄に入れた。異体字注と和訓が大半であったが、注文の種類による偏りは見られなかった。

11　仮名音注・典拠不明の漢文注のみの例を含む。

12　〔図8〕「騎」字のように、漢文注を和訓に改めた可能性はある。

13　本文韻順の中頃に出現する合点付本文の後ろの字が、合点が付されていない字であっても、その字が『広韻』に無い場合（7例）は最後尾に出現する合点付本文の欄に入れた。4-5で述べたように、『広韻』に無い字は合点の脱落の可能性があるからである。

14　これが、唐土の字書の模倣であるか、本邦独自に発達したものであるかは今のところ分からない。本邦独自に考案された増補であれば、当時の韻学の水準を示すものであるし、本邦人による模

倣であるとしても、唐土撰述の韻書・字書の内容をかなり吟味した結果によるものと考えられるのである。いずれにせよ、唐土にて、韻書を部首立てにした『類篇』成立後（治平四年（1067））、さほど時を経ずして本邦で『字鏡鈔』のような形態の書が編纂されたことは興味深い。

15　合点付本文が、第二・三群が付された際に第一群に増補されたとみることはできない。合点付本文の注文をみると（〔表5〕）、無注の字や漢文注のみの字が少なくない。もし、第二・三群が付される際の増補であったならば、注文の特徴からしてこれらの字は第二・三群に入れられるはずだからである。

16　各欄下段斜体は合点付本文の注文における数を示す。仮名音注はほぼ全ての本文に付されているので省略し、後筆の注文は除いている。

17　第二群の音注（反切・直音注・仮名音注）は省略している。異本注記4例は無視した。第三群の本文が第二群に紛れている例は第三群の表に入れた。

18　第三群の音注（反切・直音注・仮名音注）は省略している。異本注記7例は無視した。第二群の本文が第三群に紛れている例は第二群の表に入れた。

19　本文が韻順の字書についてこのような利点があることは、小川（1962）にも指摘がある。

20　『字鏡鈔』に限らず、本邦の古辞書（例えば、前田本『色葉字類抄』、観智院本『類聚名義抄』、弘治二年本『節用集』等）には、本文および注文に合点が付された例が見られる。従来はこの合点のあるなしはあまり顧みられることがなく、保留されがちであった。本文・注文に付された合点がどのような意味を有しているのかについて、注意されても良いのではないか。なお、合点について取り上げた論考に前田富祺（1967）「世尊寺本字鏡の成立―「新撰字鏡」と「類聚名義抄」との比較において―」『本邦辞書史論叢』がある。

21　乾（1995）は『字鏡集』について、「和訓は前代の『類聚名義抄』によるものも含まれるが、量的にも増えており、異体字の注記も多くなっている。（中略）『類聚名義抄』を補うところ大きなものがあり、今後の活用が期待される。」と述べる。さらに、氏が「本書が活用されるためには、本書の諸本間の整理や先行文献との対比などの基礎的な作業がまとめられなければならないし、一々の項目について本文批評と考証とが必要である」としたように、本書は古辞書中重要な位置にあることは明らかであるが、課題は多い。

【付記】

原本閲覧に際し、前田育徳会尊経閣文庫より御厚誼を賜りました。本稿は、平成二十八年度第百十四回訓点語学会（於京都大学文学部第三講義室）での発表をもとにしたものです。席上他にて、岡島昭浩先生、金水敏先生、岸本恵実先生、矢田勉先生、宮澤俊雅先生、伊藤智弘氏よりご意見を頂戴しました。また、大槻信先生をはじめ、査読を担当して下さった先生方より、用例等に関してご指摘を賜りました。記して感謝申し上げます。

［なかの　なおき、大阪大学大学院学生］